

ほっとけい会会報

「もどかしい復興の歩み」

3年ぶりに被災地に行く

「ほっとけい会」恒例の秋の旅行は、3年ぶりに東日本大震災の被災地など宮城、岩手両県を訪れた。レンタカーを主に、運転再開された三陸鉄道南リアス線やフェリーにも乗る500キロの行程。被災地は、がれきを詰めた大きい黒い袋が山積みされ、家屋もまばらで復興の歩みのもどかしさを強く感じた。それぞれの印象やエピソードをまとめた。

9月27日、仙台駅前までトヨタのノア（ハイブリッド）に。メンバーは富田、荻原、原征の諸兄と八幡の社会部OBに、ご存じ介護兼ドライバー役の久貝真澄さんの

5人。車は国道45号線を一路北上、まず南三陸町へ。2011年3月11日の大地震による津波は、町内の3つの川を逆流し、濁流が町をのみこんだ。死者、行方不明835人。被害地の象徴となった3階建ての防災対策庁舎は、骨組みだけを残して破壊された。その前の祭壇に私たちは、線香を手向けて犠牲者の冥福を祈った。

この南三陸さん商店街近くにある、富信さんが知人に紹介された寿司店「くう海」で昼食。地元の新鮮な魚介が盛られた海鮮丼に舌鼓をうってから、気仙沼へ向かった。

車から見ると、前回（震災6か月後）目についた壊れた校舎、横転したままの車こそなくなつたが、見渡す限り荒涼とした更地が広がる。一体、いつになつたら

この惨状が消えるのか。南三陸町から1時間半で気仙沼市へ着く。大通りを挟んだ市街地は地震後に起きた大火災で消滅し、痛ましい傷跡はそのままだ。観光棧橋からフェリーで大島へ渡る。搭載された乗用車10数台には品川や横浜に交じって札幌ナンバーも。遠い地方からの観光客が多いようだ。25分まで到着し、迎えるバスで小高い山を登って、休暇村気仙沼大島へ。

対岸に広がる海や山並み、眺望のいい景勝地である。ホタテのあぶり焼きなど海の幸と地酒の夕食後、休暇村の会議室で「震災語り部」があった。30人ほどの泊り客と聞く。島は山々に囲まれているのに、3000人の住民のうち、34人が逃げ遅れて亡くなった。

「真つ黒な山のような波が一つ、二つ、五つも襲い、これで死ぬのかと思つたんですよ」。ボランテニアガイドをしていたという村上まき子さんが、1時間近く語った。（八幡）

うれしかった「トモダチ作戦」 米海兵隊との別れ惜しむ

初日の宿は富田コンダクタ

うれしい限り。うまい魚と地酒に満足して部屋に引き揚げようと腰を上げたら、

のある休暇村気仙沼大島。復旧が進んだのか、震災の跡がほとんど分からない気仙沼港からフェリーで25分。「大島」といっても面積約9キロの小さな島だ。港に着くと休暇村の迎えのバスが待っていて5分足らずで宿舎に。ここも津波が襲ったというが、見た目には爪痕はわからない。

「これから震災語り部のお話があります」の館内放送。前回の被災地見学は、「見る」は盛りだくさんだったが、被災者の生々しい話を「聞く」機会がなかった。

ひと風呂浴びて夕食だ。バイキングでイカ、タコをはじめ三陸の魚や昆布が並んでいる。香ばしい匂いがすると思ったらホタテを焼いていた。信州の山猿には

語り部は元ボランティアガイドの村上まき子さん。東北なまりでとつとつと被災時の様子を語る。「人口3千人ちよつとの島で34人が亡くなつたり、行方不明になつた」「津波でフェリーも流され、気仙沼に行つた夫や子どもとの連絡もできなかつた」。



奇跡の一本松前でご一行様

孤立していた島に最初に来てくれたのが米軍「トモダチ作戦」の海兵隊員たち。「兵隊さんたちはとても優しくしてくれた」と何度も繰り返す。沖縄では嫌われ海兵隊もここでは大歓迎されたようだ。（荻原）

「兵隊さんたちはとても優しくしてくれた」と何度も繰り返す。沖縄では嫌われ海兵隊もここでは大歓迎されたようだ。（荻原）



震災の語り部に聞き入る宿泊客



休暇村の夕食はバイキング